

1946（昭和 21）年4月に復刊後、全国的発展にともない、1968（昭和 43）年1月に比庵が主宰する『窓日』へ改題。現在も全国に会員を有する短歌会として活動を続けています。

資料**清水比庵** **《**『**下野短歌**』**装幀原画**（クログアゲハ）**》**制作年不詳 紙本墨画、まくり 25.5×17.0 cm 平成 18 年度寄贈

資料**小杉放菴** **《**『**清水比庵宛書簡**』**》**1939（昭和 14）年6月 紙本墨書、軸装 平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**釈文**: 梅雨連天一山の雨の音を聞かれ居らるゝこと、存候 此度の御退身まことに本意なき次第と思ふあまりにこの二荒一図を拝呈致候 日光の者の中に往生も老兄の數年私なき町政の御骨折を知る一人なることを表はし度きまゝに候 御笑留を得ば幸甚に候／六月廿九日 放菴啓／比庵老兄几下**解説**: 比庵が日光町長を辞した時に、小杉放菴から届いた書簡。日光の観光行政の基礎を築き上げた業績が高く評価されている比庵だが、1939 年に部下の不始末の責任をとって辞職するという結末を迎えた。小杉の書簡はそれを労り、男体山の絵を1点贈するという内容が記されている。この絵については現在、所在不明。

01010170**清水比庵** **《**『**貼交屏風**』**》**1930 年代後半 紙本墨画淡彩、屏風（二曲一隻）173.5×87.5 cm（外寸）平成 27 年度寄贈**釈文**: ものこひて みつればうたをよましけむ 良寛僧のおもほゆるかも／ともしきに みちたらひて歌よみて つねありがたくありにけむかも 比庵**解説**: 右から良寛、笹にカエル、岩にセキレイ、菊の花。短歌のない絵のみという比庵作品は珍しい。雅号を（比舟）から〈比庵〉へ変えた 1935（昭和 10）年から、日光町長を辞す 1939（昭和 14）年までのあいだに制作されたと考えられる、初期の貴重な作品です。比庵と親交があった宇都宮の教育者鈴木陽吉氏、またその娘で比庵に短歌の指導を受けていた松浦永子氏の旧蔵品。もともと比庵から贈られたこれらの水墨画が屏風仕立てになっていましたが、当館寄贈後の修復時に、絵の順番はそのままに新しい屏風へ仕立て直しました。

01010097**清水比庵** **《**『**南瓜**』**》**1940 年代 紙本着色、額装 31.6×40.6 cm 平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**釈文**: 日よけにも ならむとおもひ窓まへに うゑし南瓜ののびのびて 棚はひわたりひろき葉の しじにしげりて大き花黄に ききつぎてあはれこはいみじき日よけうつくしと ほめてありしが涼しとは めでてありしがしじに葉はしけりてあれどつぎつぎに 花はさきども実のならぬ いかにか花さきて実にならざるはたが恋か これは日よけの南瓜の蔓なり 比庵

資料**【日光市名誉市民経歴及事績】****刊行年**: 1958（昭和 33）年 **発行元**: 日光市平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**解説**: 旧日光市が 1958 年に初の名誉市民として清水比庵、小杉放菴、徳川家正を推挙した際に発行した各受章者の経歴紹介パンフレット。

資料**【市制五年のあゆみ】****刊行年月**: 1959（昭和 34）年4月 **発行元**: 日光市 **装幀**: 清水比庵平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**解説**: 日光町と小栗川村の合併により旧日光市が誕生してから 5 周年を記念して刊行された記念誌。1958 年に初の名誉市民として推挙された清水比庵、小杉放菴、徳川家正の紹介頁もあります。

01070022**清水比庵** **《**『**餘情**』**》**1959（昭和 34）年 77 歳 紙本墨書、額装 31.0×57.8 cm 平成 12 年度寄贈**釈文**: 余情 喜寿 比庵

01010096**清水比庵** **《**『**谷深く**』**》**1960 年代 紙本墨画淡彩、軸装 38.0×46.2 cm 平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**釈文**: 谷深く 石を伝へるせきれの それとは見えていと小さきかも 比庵

01010099**清水比庵** **《**『**海へ来て**』**》**1950-1960 年代 紙本墨画淡彩、額装 34.5×49.0 cm 平成 14 年度購入**釈文**: 海へ来て いとほろぼろと見わたしぬ 海のはてには折りのあるか 比庵

01010098**清水比庵** **《**『**彩果**』**》**1962（昭和 37）年 80 歳 紙本着色、額装 34.0×46.0 cm 平成 14 年度購入**釈文**: ともし火を 近く寄せつつ坐りたり 浮世の秋の一ところなり 八十 比庵**解説**: 比庵は数えて 93 歳の長命でしたが、意外にも大の野菜嫌いでした。代わりに好んでいたのが果物で、〈不味いものは栄養にならん、おれの野菜は果物じゃ、と勝手な理くつつをつけて、うまいうまいと果物はたくさん食べる。ご飯は入らぬが果物だけ、ということもあった〉とか（清水明子「老いのあけくれ」『比庵あけくれ』私家版、1981）。贈られてきた果物はいつも絵に描いてから食べていたそうです。

01070016**清水比庵** **《**『**年々に・・・**』**》**1962（昭和 37）年 80 歳 紙本墨画、額装 27.1×24.1 cm 平成 4 年度寄贈**釈文**: 年々に よき年なれといのりつゝ 拾へる年のつもりたるかも 比庵 八十

01010095**清水比庵** **《**『**老松**』**》**1962（昭和 37）年 80 歳 紙本着色、軸装 113.0×34.2 cm 平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**釈文**: らんらんと 金色上る朝日かげ 今日もあまねく晴れわたりたり 比庵 八十写**解説**: 老松（おいまつ）は長寿の象徴として古くから好まれてきた、謡曲から発祥した画題。比庵は喜寿を迎えた頃からよく小幅に松を描くようになりましたが、交流のあった洋画家小林和作からもっと大きく描くよう勧められ、1962 年の書初めに本作のような大きな老松を何枚も描いたと伝えられます。老いながらも力強く、楽しみにうねる松の木は、まるで人生まだまだこれからと筆をとり続けた比庵の自画像のようです。

01070037**清水比庵** **《**『**新年**』**》**1963（昭和 38）年 81 歳 紙本墨書金泥、軸装 26.8×42.4 cm 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]**釈文**: うつくしきもの 若くあり強きもの また若くあり年あたらしく 八十一 比庵

寄託**清水比庵** **《**『**果実図**』**》**1963（昭和 38）年頃 81 歳頃 紙本墨画淡彩、額装 34.0×44.8 cm 平成 26 年度寄託**釈文**: 大空を おほひ尽せる雨雲が そぞろにうごく大空うごく 比庵

寄託**清水比庵** **《**『**竹に雀**』**》**1963（昭和 38）年 81 歳 紙本墨画、額装 34.8×53.3 cm 平成 26 年度寄託**釈文**: くれなみに にほへる朝に始まりて わが一日をひとりたのしむ 八十一比庵

寄託**清水比庵** **《**『**蓮に蛙**』**》**1963（昭和 38）年 81 歳 紙本墨画淡彩、額装 34.8×53.3 cm 平成 26 年度寄託**釈文**: 久しくも 見ざりし人にあひたるよ 生けるしるしのある一日なり 八十一比庵

01070038**清水比庵** **《**『**毎日佳境**』**》**1963（昭和 38）年 81 歳 紙本墨書、軸装 88.8×34.4 cm 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]**釈文**: 毎日佳境 八十一 比庵**解説**: 比庵と交流のあった歌人・丹内福壽が鉄道会社員として福島県白河市に勤務していた頃、1963 年 2 月 2 日付の比庵からの書簡に、《毎日佳境》の書を送るので、歌会をやる時にいつもかけてください、とあり、本作がこれに該当する書と考えられます。**比庵の言葉**: 〈『毎日佳境』これが小生の標題である。歌詠みは常に佳作を得ることは難かしい、しかし常に佳境に居るといふのは心掛けである。歌が何故に楽しいかといへば毎日佳境に居ることが出来るから楽しいのである。毎日佳境に居れば、佳作は自然に偶然に出来る、佳作は求めても容易に出来ない、しかし佳境に居るといふことがほんとうにわかってくると佳作偶然度は多くなってくる。〉（『駒込だより』『下野短歌』33 巻6号、1961）

01070039**清水比庵** **《**『**毎日歌境**』**》**

1964（昭和 39）年 82 歳 紙本墨書、軸装 97.0×31.2 cm 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]**釈文**: 毎日歌境 比庵 八十二**比庵の言葉**: 〈増淵（泉雨）さんから蚤のやうに小さい字書いた葉書が来、それで拡大鏡を用て読んでみると、今回塩谷支社を設立するといふことが書いてあった。増淵さんは各地の歌会へもよく顔を出して熱心に歌を楽しんでゐる人であるから塩谷支社は必ずよい発展を遂げるであらうと思ひ、鹿沼、宇都宮、白河等の支社へ、「毎日佳境」と大書したものを送ったから、塩谷支社へも同じものを送らうと思ひ筆を執つて紙に向つた瞬間、「佳境」を「歌境」と變へて書いたらどうであらうと思ひ、伏見稲荷大社の宮司から送られた赤紙へ太々と「毎日歌境」と書いて送つた。／それからどうもこの「毎日歌境」が自分も気に入つた。「毎日佳境」といふ文句は良寛の詩「故郷ヲ出デテヨリ後、東方諸国ノ行、毎日佳境ヲ過グルモ、寸短詩成ラズ」といふものから得た詞であるが、良寛のやうに云ふと佳境が消えてしまふ、只「佳境」とだけ云つておけば佳境は一のイメージになって眼前にある、といふことは前にも云つたことがあるが、之を「歌境」と變へて書く和我々には更に楽しく、更に親しいものとなる。〉（『駒込だより』『下野短歌』36 巻9号、1964）

01070040**清水比庵** **《**『**東海南山**』**》**1964（昭和 39）年 82 歳 紙本墨書、軸装 33.8×54.4 cm 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]**釈文**: 東海南山 八十二 比庵**解説**: 丹内福壽の名を褒めていた比庵は、中国の老人への祝いの言葉である「福如東海長流水 寿比南山不老松（福は東海へ流れる水のように長く、寿は終南山の松のように老いることはない）」からとつた《東海南山》という書を丹内へ送つていたことが 1964 年 1 月 22 日付書簡からわかつており、本作がその該当作と考えられます。

01070023**清水比庵** **《**『**晴好雨奇**（蘇東坡）**》**1967（昭和 42）年 85 歳 紙本墨書、軸装 136.6×68.0 cm 平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**釈文**: 水光瀲灩晴偏好 山色空濛雨亦奇 若把西湖比西子 淡粧濃抹總相宜**解説**: 湖面を照らす日の光がさき波に写る晴れた日の湖はとても良い。周りの山々が霞んで見える雨の景色もまた素晴らしい。この西湖の美しさは、まるで絶世の美女西施が薄化粧の時も厚化粧の時もどちらも素晴らしいかつたかのようだ。北宋時代の詩人・蘇軾（1036～1101）の「飲湖上初晴後雨詩」より。

01070041**清水比庵** **《**『**福寿**』**》**1969（昭和 44）年 87 歳 紙本墨書、軸装 98.2×32.0 cm 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]**釈文**: 福寿 比庵 八十七**解説**: 「福寿」は、幸福で長命であることを表すおめでたい言葉。比庵はこれを名にもつ丹内福壽への書簡（1964.1.22 付）のなかで、〈貴兄の名は完全に貴兄を表現してゐる。〉〈貴兄はまことに福寿相をした人物です。この福寿は物質的の意味に取る人が多いが、小生は主として精神的のことを話題と致します〉と述べています。

01070031**清水比庵** **《**『**長春**』**》**1972（昭和 47）年 90 歳 紙本墨書、軸装 51.6×40.0 cm 平成 23 年度購入**釈文**: 長春 比庵 九十試筆

01070024**清水比庵** **《**『**新年詠**』**》**1975（昭和 50）年 93 歳 紙本墨書、軸装 23.4×35.0 cm 平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]**釈文**: 新年詠 満天の くれなみや天地の 神の恋やら比庵恋やら 比庵 九十三**解説**: 没年の正月に詠まれた歌。手書きの扇形に放射状に配された字が心地よいリズムを生んでいます。晩年の比庵は、朝夕の茜空を好んで詠んでいました。くれないの空に亡き妻を思い浮べたのか。どこか寂しさを感じさせる歌です。

01070027**清水比庵** **《**『**祭り**』**》**1975（昭和 50）年 93 歳 紙本墨書、額装 30.6×96.5 cm 平成 17 年度管理換**釈文**: 御題 祭り 八百よろづ 神のいませばさかえゆく まちも村居もまつりの大鼓 比庵 九十三

資料**清水比庵** **《**『**大日光**』**装幀原画**（楓に瑠璃鳥）**》**制作年不詳 紙本着色、まくり 26.0×37.5 cm 平成 20 年度寄贈**解説**: 比庵は、数えて 76 歳の 1958（昭和 33）年から、93 歳で亡くなる 1975（昭和 50）年まで 18 年間にわたり、日光東照宮が発行する機関誌『大日光』の表紙絵を担当しました。本作はそのうちの原画のひとつと考えられます。

資料**清水比庵**・**小杉放菴関係資料**アルバム 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]**解説**: 歌人丹内福壽が、親しかつた清水比庵を中心に、周辺人物の書簡や写真をアルバムに貼りつけ保存していたもの。小杉放菴の葉書も含まれている。

資料**清水比庵** **《**『**丹内福壽宛書簡**』**》**1956（昭和 31）年～1972（昭和 47）年 令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]

小杉放菴

※年齢は数え年

01070033**小杉放菴** **《**『**臥看山**』**》**1940 年代 紙本墨書、額装 19.0×53.2 cm 平成 24 年度購入**書き下し**: 臥（ふ）して山を見る

01070006**小杉放菴** **《**『**人似花酒如泉**』**》**1940-1950 年代 紙本墨書、額装 31.5×92.5 cm 平成 4 年度寄贈**書き下し**: 人 花に似て 酒 泉の如し

01070010**小杉放菴** **《**『**茶三昧**』**》**1950 年代 紙本墨書、額装 31.5×51.8 cm 平成 4 年度寄贈

01070011**小杉放菴** **《**『**清風**』**》**1950-1960 年代 紙本墨書、額装 31.5×51.8 cm 平成 4 年度寄贈

01070026**小杉放菴** **《**『**満堂春風**』**》**1950-1960 年代 紙本墨書、額装 23.5×83.0 cm 平成 17 年度寄贈**書き下し**: 春風（しゅんふう）堂に満つる

01070012**小杉放菴** **《**『**日々是好日**』**》**1950-1960 年代 紙本墨書、軸装 133.8×37.9 cm 平成 4 年度寄贈**解説**: にちにちこれこうにち。晴れの日は晴れを楽しみ、雨の日は雨の日を楽しむ、毎日平和な良い日として生きていくこと。中国・宋時代の仏教書『碧巖録』（1125 年）に記された言葉。

01020007**小杉未醒** **《**『**放菴**』**《**『**泉**』**》**1925（大正 14）年頃 45 歳頃 カンヴァス／油彩 179.0×363.0cm 平成 4 年度寄贈

資料**小杉未醒** **《**『**放菴**』**『**漫画一年』**》****刊行年月**: 1907（明治 40）年 10 月第 4 版 ※初版は同年 1 月刊**発行元**: 佐久良書房 小杉放菴記念日光美術館蔵**比庵の言葉**: 〈先般東照宮で小杉放庵先生の追悼歌会があった。小生にも案内が来てみた、小生も出席する義理があるけれど暑いときなのでかんべんして貰つた。しかし歌だけは出した。／小杉未醒の漫画本よりわれい画を習ひしことをかしくみてます／未醒は放庵の若いときの筆名である。当時未醒は実によい漫画を沢山かいた、漫画といふのは今日の漫画とはちがひ、文芸的の雑画である。小生はこの歌で故人との親しみを詠んだつもりである。〉（『駒込だより』『下野短歌』36 巻 11 号、1964）

01010172**小杉未醒** **《**『**放菴**』**《**『**戊年三月図**』**》**1910（明治 43）年 30 歳 紙本墨画淡彩、軸装 107.6×45.2 cm 平成 28 年度購入**解説**: 小杉放菴が〈未醒〉と号していた時代に制作された日本画。この作品が制作された年には、長女が生まれており、初節句のために描かれたのではないかと推定されます。